

第9回国際古代西アジア考古学会議に参加して

宮内 優子

Notes on 9ICAANE in Basel

Yuko MIYAUCHI

キーワード：古代西アジア、国際会議、最新調査報告、先史時代、イスラム時代

Key-words: Ancient Near East, international congress, latest fieldwork, prehistoric, Islamic period

ICAANEは、International Congress on the Archaeology of the Ancient Near Eastの略称であり、古代西アジア考古学の国際会議である。その第9回目の会議が2014年6月9日から13日の5日間にわたってスイスのバーゼルにて開催された(図1)。今回の会議では、380近くの口頭発表と60ほどのポスターに加え、17のワークショップ、6つの記念講演が行われた。以下では会議全体の概要や発表テーマ、ワークショップの内容について報告する。

より詳細な発表については、プログラムと発表要旨、それにポスター要旨が9ICAANEのホームページ(<https://9icaane.unibas.ch/>)からダウンロードできるので参照されたい。

会議の概要

本会議が開催されたバーゼルは、ドイツ・フランスとの国境近くに位置し、チューリッヒ、ジュネーヴに次ぐ、スイス第3の都市である。市街地をライン川がまたぎ、初夏であったこともあり、川で気持ち良さそうに泳いでいる人々をみかけた。市内はバスと路面電車による交通網が発達しており、「バーゼルカード」と呼ばれるカードがあれば、滞在中は乗り降りが自由に行える。

今回の会場となったバーゼル大学は、1460年に創立されたスイス最古の大学である。歴史的な街並みを残す旧市街の中心部に位置し、会議はそのキャンパス内にあるKollegienhausという建物で行われた。

ワークショップを含めると520余りにもなる口頭発表を5日間で行なったため、発表会場は10か所に分かれた。そのため、発表への参加は選択的なものとならざるを得な



図1 会場に掲げられた幟



図2 会場となったバーゼル大学のKollegienhaus

かった。しかし、本会議では全ての発表が同じ建物内で行われたため、移動がしやすく効率的に会場を回ることができた。

初日の発表は午後から、その他の日は朝9時から発表がはじまり、午前30分間のコーヒブレイク、昼休憩が1時間半、午後にもう一度30分間のコーヒブレイクがあり、最後の発表は18:30までだった。発表時間は各自25分であった。会場内には終日3か所に軽食とドリンクが用意されており、飲み物を片手に談笑している方々をみかけた。初日の夜は、会場となった建物でレセプションがあり、2日、3日目の夜は、講演会が行われた。4日目の夜は古代博物館 (Antikenmuseum Basel) にてレセプションが開催された。

発表テーマ

会議のメインとなる一般発表は、以下の7つのテーマに分かれて行なわれた。

1) エジプトと古代西アジア—他性の認識 (Egypt and Ancient Near East – Perceptions of Alterity)

古代西アジアの人々が、他者であるエジプトをどのように認識していたのかを、考古遺物を通して考察を行なうことを目的とした。23の発表の内、6つの発表がテル・エル・ダブア (Tell el-Dab'a) についての発表であった。

2) イメージの伝達—視覚的アイディアの移動と変容 (Travelling Images – Transfer and Transformation of Visual Ideas)

あるイメージが他の場所に伝えられたとき、どのように受容、解釈、変容し、またなぜ拒絶されたのかを模索することを目的とした。

3) 古代西アジアの伝統とヘレニズム／ローマ (Ancient Near Eastern Traditions vs Hellenization/Romanization)

地域は地中海からガンジス河まで、時代はアケメネス朝からササン朝までを対象とし、ヘレニズムとローマの文化がどのように東方へ広がっていったのかを議論した。

4) 古代における生態系の復元 (Reconstructing Ancient Eco-Systems)

自然環境、気候、集落形態、人口、土地活用など、多岐にわたる視点から、古代の生態系を明らかにすることを目的としたものである。

5) 過去を論じる：遺物、戦利品、献上品、スポリア、伝世品 (Dealing with the Past: Finds, Booty, Gifts, Spoils, Heir-

looms)

戦利品やスポリア、伝世品など、本来のコンテキストからはずれてしまった遺物を対象として、その解釈を試みるものである。

6) 調査報告 (Excavation Reports and Summaries in Near Eastern Archaeology)

西アジアにおける近年の調査についての報告である。発表の数が最も多く、170近くの発表があった。常時2つ以上、最大4か所の会場で開催され、地域と時代によって大まかにまとめられていた。日本西アジア考古学会からは、4名の会員が発表された。

藤井純夫氏は、南ヨルダン、アウジャ1号 ('Awja 1) について、後期新石器時代の祭祀遺跡の調査報告を行なわれた。調査では2列立石によるネコ科動物群の表象遺構と、それにつづく祭祀遺構が確認された。同様の遺構はシナイ半島とネゲブ高原からも発見されており、遊牧化の過程と周辺地域との関係について述べられた。

常木晃氏は、北東イラン、新石器時代のタペ・サンギ・チャハマック (Tappeh Sang-e Chakhmaq) について、1970年代に行なわれた調査の再整理と年代測定の結果について発表され、北東イランにおける新石器化の過程について述べられた。

小泉龍人氏はトルコ、サラット・テペ (Salat Tepe) における2010年から2013年までの調査について、後期銅石器時代初頭の土器製作に関わる遺構や、ウバイド終末期の小児埋葬など、ウバイド前期後半から後期銅石器時代初頭にかけての層位的な編年について言及された。

門脇誠二氏は、アゼルバイジャン、新石器時代のハッジ・エラムハンル・テペ (Hacı Elamxanlı Tepe) での2012年・2013年の調査について、同地域の新石器時代の遺跡であるギョイトペ (Göytepe) との比較を行なった。両遺跡間には、建物の構造、土器、石器、骨製品、動物相、植物相など、異なる文化的特徴があり、ハッジ・エラムハンル・テペがギョイトペよりも数百年ほど遡ることを指摘された。

また、本会議ではイランとイラク、クルディスタンの調査報告が比較的多いように感じられた。

7) イスラム時代 (Islamic Session)

イスラム時代の考古学に関する分科会である。時代はオスマン時代までを対象とし、5つのテーマに分かれておよそ40の発表が行われた。

ワークショップ

合わせて14のワークショップが開催され、それぞれ10

ほどの発表が行われた。以下がそれぞれのタイトルと概要である。

1) 新石器時におけるコーポレート・アイデンティティーの構築 (The Construction of Neolithic Corporate Identities)

遊動性の狩猟採集社会から、定住性の複雑な社会へと社会構造が大きく変化した新石器時代について、これまではその経済的な側面ばかりが強調されてきたと批判。その上で、大規模な社会を統率するためには、Corporate Identity が必須であったとし、後期旧石器時代から新石器時代にかけての Corporate Identity がどのように構築されていったのかを明らかにすることを試みた。ワークショップのテーマは Corporate Identity であったが、そもそも Corporate Identity がどのようなものなのか、という定義が不十分であったように感じられた。Corporate Identity とはそもそも企業イメージの統一戦略（例えば、企業マークやキャッチコピーなど）の意で用いられる言葉である。また、Corporate Identity と似たような意味の言葉で Communal Identity という言葉が挙げられるが、なぜあえて Corporate という言葉を用いたのか、その意図が不明瞭であったように感じられた。

2) 紀元前 3000 年から 1000 年にかけての移行期の編年：¹⁴C に基づく絶対年代と、物質文化に基づく相対年代との比較 (The Chronology of Transitional Periods from 3000-1000 BCE: Comparing Absolute Chronologies Based on ¹⁴C to Relative Chronologies Based on Material Culture)

¹⁴C による年代測定が活発に行われる現在、¹⁴C に基づく編年と考古資料に基づく編年との間に隔たりが生じてしまうこともある。そこで、このワークショップでは、初期青銅器時代から鉄器時代までを対象とし、両者の間で編年に合意は得られるのかを試みた。

3) 沙漠のカイト・サイト—その考古学的証拠、分布、そして機能 (Desert Kites - Archaeological Facts, Distribution and Function)

近年調査が進んでいるカイト・サイトについて、その代表的な石壁の囲い遺構など、カイト・サイトの機能とそれを築いた社会について議論が行われた。

4) 骨製の遺物と関連遺物：製作、型式学、そして使用法 (Artifacts made out of Bone and Related Materials: Manufacture, Typology and Use)

骨製や貝製など、動物由来の遺物に焦点をあて、新石器時代からイスラム時代までの長い期間を対象とし、制作方

法、流通が原材料であったのか製品だったのか、型式学と編年、使用痕、など多角的な視点からの議論を試みた。

5) 北方メソポタミアにおける社会の複雑化をたどる：ハラフ期を起源とした、社会の複雑化のプロセスとダイナミクス (Trajectories of Complexity in Upper Mesopotamia: Processes and Dynamics of Social Complexity and their Origin in the Halaf Period)

紀元前 7 千年紀から 4 千年紀にかけてみられた社会の複雑化について、その起源をハラフ期にもとめ、社会の複雑化の過程をセトルメント・パターンや土器などの遺物から議論した。

6) 危機に瀕する文化財：西アジアの考古資料を管理するための持続可能な方法 (Collections at Risk: Sustainable Strategies for Managing Near Eastern Archaeological Collections)

西アジアの文化財は現在、紛争による略奪や破壊だけではなく、博物館での管理方法や保管状況など、様々な問題を抱えている。このワークショップでは、西アジアの文化財について、シリアやアフガニスタンなどの紛争地帯における文化財の現状、博物館等に収蔵されている資料の管理と活用方法などを議論した。

7) 紀元前 4 千年紀から 2 千年紀にかけてのオロンテス渓谷の集落景観 (The Settlement Landscape of the Orontes Valley in the Fourth through Second Millennia BCE)

オロンテス渓谷の小規模集落に焦点を当て、集落間の交易網、周辺のメガ・サイトからの影響、など紀元前 4 千年紀から 2 千年紀にかけてのオロンテス渓谷の集落景観について議論した。

8) 式典をたどる—過去における「過去」の社会的側面 (Tracing Commemoration - Social Dimensions of the Past in the Past)

死者に対する追悼式典、ある特定の個人（王など）や歴史的出来事に対する記念式典、という 2 つテーマから、中期青銅器時代以降の式典について文献資料や考古資料を用いながら、式典の社会的機能を議論した。

9) 鉄器時代のネゲブとアラバの考古学 (Archaeology of the Negev and the 'Arabah during the Iron Age)

初期鉄器時代におけるネゲブ、アラバ、アラビア半島の関係について、アラバの銅生産とクライヤ土器から議論を行なった。

10) 後期新石器時代の西アジアにおける、チャタルホユックの位置づけ (Late Neolithic at Catalhöyük in the Near Eastern Context)

トルコのチャタルホユック (Çatalhöyük) では、後期新石器時代になると住居の形態や埋葬方法、象徴的な図像が減少するなど、大きな変化がみられる。この、後期新石器時代における変化について、他の地域との比較も行いながら、西アジアの後期新石器時代のなかに位置づけた。

11) 博物館と古代西アジア：展示と見学者 (Museums and the Ancient Middle East: Exhibit Practice and Audiences)

古代西アジアに関連する展示は世界中の博物館で行われているが、これまでに古代西アジアの展示に携わる学芸員同士がその展示方法について議論する正式な機会はあまりなかった。そこで、このワークショップでは、歴史系博物館、美術館、大学博物館など様々な博物館の学芸員が集い、古代西アジアの資料の展示について議論を行なった。

12) 西アジアのヘレニズム時代とローマ時代におけるエリートたちの邸宅 (Elite Residences in the Hellenistic and Roman Near East)

宮殿やヴィラなどエリートたちの邸宅には、新旧の伝統が共存してみられることがある。このワークショップでは、ユダヤとトランスヨルダンにみられる、ヘロデ王やナバテアの王たちの邸宅遺跡と埋葬遺構について議論を行なった。

13) 西アジア考古学における民族考古学と実験考古学 (Ethnoarchaeology and Experimental Studies in Near Eastern Archaeology)

西アジア考古学における民族考古学と実験考古学について、その方法論、理論、研究デザイン、結果の解釈の仕方が、新石器時代の石皿、カマドにみられる調理痕、動物の糞からつくられた燃料の化学分析などのケーススタディを交えながら議論された。

14) 古代西アジアにおける灌漑と水利 (Irrigation and Water Works in the Ancient Near East)

アケメネス朝ペルシャとササン朝ペルシャにみられる灌漑と水利技術について、水と支配体制との関係や、古代ギリシャとの比較などの議論が行なわれた。

ポスター発表

ポスターセッションは2日目の午後に行なわれ、約60の研究が参加した。本学会からは、足立拓朗氏がビシュリ

山系北西麓のケルン文化について、青銅製トグル・ピン、小型の短頸瓶、青銅製短剣などの遺物の比較と、¹⁴C年代測定の結果から、当地域におけるケルン文化が中期青銅器時代IB期に始まり、4つの時期に区分できることを発表された。著者もポスターセッションに参加し、イラン、タベ・サンギ・チャハマックから出土した未成人骨について、死亡年齢推定の結果、その約半数が妊娠満期に相当する胎齢10ヶ月であり、また子どもと成人とは埋葬場所が区別されていた可能性を指摘した。ポスター会場は、口頭発表が行なわれた建物の2階の廊下であったため、発表の間に適宜見学することができた。しかし、ポスターの掲示場所は順不同であったため、自分の興味のあるポスターを探すのに苦労した。時代や地域ごとにまとまっていた方が、効率よく見ることができ便利であったと思う。

会議の総括

以上、第9回 ICAANE について報告させていただいた。筆者は今回初めて ICAANE に参加したが、その発表テーマの多様さにただただ驚くばかりであった。本会議は、テーマが7、ワークショップが14設けられ、テーマとワークショップの数は年々増加している。発表のテーマが細分化されることによって、研究分野の近い研究者同士により密な議論が可能になったように感じられた。聴衆にとっても発表の内容に一貫性がみられ、第6回 ICAANE について門脇氏が指摘されたような、発表内容の統一性が薄い (門脇 2009: 81)、という点はやや改善されたように思われた。

また、ヨーロッパからの学生の参加が多いことに驚いた。彼らにとって、ICAANE は開催場所も近く、比較的参加しやすいという意見も聞かれた。学生はポスター発表の方が多かったが、口頭発表では博士課程の学生が執筆中の博士論文の内容について発表しているものもいくつか見受けられた。学生にとっては現在進行中の研究に対する意見を、第一線で活躍する研究者から得られる絶好の機会であるといえよう。

大規模な会議であるため、発表の募集と締め切りが早く、発表がキャンセルになってしまうことは仕方がないと思う。しかし、プログラムに穴が開いてしまった場合、その対応は座長に一任されており、座長によっては発表を繰り上げる、プログラム通りに進めるため空き時間にする、など対応が分かれた。ワークショップは発表の時間が明確に決められていなかったため、特にその傾向がみられた。その結果、聞きたかった発表を聞き逃してしまうこともあったので、対応は統一してもらいたい。

なお、本会議の報告集は2年後の第10回 ICAANE にて3冊組で公刊される予定である。次回の会議は2016年

にウィーンで開催されるとのことであるが、開催期間や詳細等はまだ明らかになっていない。次回の会議も今回と同様に数多くの参加者が集い、多様な内容の発表が行われることを期待する。

最後ではあるが、今回の会議の開催にあたりご尽力された主催者の方々ならびに、バーゼル大学の関係者各位、そして発表にあたりご指導下さった聖マリアンナ医科大学の

長岡朋人先生、長野県立看護大学の多賀谷昭先生、そして参加を勧めて下さった常木晃先生に、深く御礼申し上げます。

参考文献

門脇誠二 2009「第6回国際古代西アジア考古学会議に参加して」『西アジア考古学』10号 77-82頁。

宮内 優子
筑波大学大学院人文社会科学研究所博士課程
Yuko MIYAUCHI
University of Tsukuba